

第 118 回研究会

「移動する『家族』：トランスナショナルな生活世界のエスノグラフィー」

坪内健、北海道大学

開催概要

企 画：建築社会研究委員会

日 時：2020 年 2 月 15 日（土）13：00～15：00

会 場：みちくさくらす（東京都新宿区市谷柳町 7）

参加者：13 名

1）主旨説明（岩佐明彦・法政大学）

近年、国境を超えた移動が一般的になり家族の関係は大きく変化している。そうしたトランスナショナルな家族のあり方について、映像エスノグラフィーの手法を用いて博士論文を提出された大橋氏に話題提供をお願いする。学位審査の際に映像を提出するのも興味深い。映画の鑑賞に加え、それらの背景や経緯も伺った上でディスカッションを行う。

2）研究概要（映像作品の制作背景）紹介

（大橋香奈・慶應義塾大学）

研究の道に進んだきっかけは、夫の研究のために会社を辞めてフィンランドへ引越したことだ。フィンランドは日照時間が短く転居後しばらくの間は鬱々と過ごしていたが、大学で文化人類学を学んだことを思い出し、夫とともにフィールドワークを始めた。調査で得た情報を Web サイトや書籍のかたちで発信していたものの、使用言語の異なる取材先の人たちには読んでもらえないことに心残りを感じていた。映像によって成果を共有する方法は、そのときから考え始めたものだ。その後、ロンドンのフィルムスクールでドキュメンタリー映像制作を学んだ。

研究は、トランスナショナルな家族をめぐる生活世界の理解をテーマにしている。引越しが多い家庭で育ち、家族と移動が両立するのか幼い頃から疑問に感じていた。その後、社会学を学ぶ中で、固定された枠組みの中で社会を論じるのではなく、枠組みの越境に主眼を置き、「移動の社会学」を提唱したジョン・アーリに大きな影響を受けた。また、「家族社会学」にも関心がある。今日では、定住し一屋根の下で家族関係を築くだけでなく、家族が国境を越えて移動を行いながらも、ともに生きている家族の関係もある。

博士論文では、上記の経緯を踏まえつつ、映像エスノグラフィーの方法を採用し、母国と他国の間で

交流しながら家族関係を築く 5 人の映像を制作した。その際、サラ・ピンクによる「ビジュアルエスノグラフィー」を参照しながら、研究者による一方的な記述ではなく、調査協力者との協働的な関係のもとでの記述を重視した。インタビューでは、カレンダーや日記、レシートなどの「生活記録」を用いて対話を行った。「生活記録」を用いることで、協力者が無自覚な生活の気づきを見出したり、協力者にとっては自明視される文化について共有できたりした。例えば、ネパール出身の協力者の場合、二つのカレンダーアプリを使っており、アプリを通じて二つの暦をもとにした生活があることを発見できた。また、映像を制作する際には、インタビューの文字起こしデータを協力者と読み合わせ、ナレーション原稿の編集と録音を協力者にお願いしている。

さらに、調査協力者のみならず、研究成果を共有する相手との協働的なあり方についても、映像の可能性を感じている。具体的には、移動巡回型の上映会を展開しており、上映を希望する場所に研究者が赴き議論の場を設える「モバイル・ラボラトリー」の活動を行っている。これは、鑑賞されて初めて作品が成立すると考えるアートベース・リサーチの考え方や、指導教員の加藤文俊が人々の日常生活が展開される現場でのフィールドワークと概念化を行うコンセプトワークの間を橋渡しするラボラトリーワークの重要性とそのあり方について議論したことを参考にしている。web 上に映像作品の情報を公開した上で上映会の開催希望を募集し、希望者と相談して多様な場所、人々を対象に開催している。滋賀県の地域交流拠点で 3 人の高齢者に鑑賞してもらったときは、先祖代々その地に定住しており移動の発想はなかったという人たちと議論することもできた。上映会は、1,000 人に鑑賞してもらうことを目標に、今回で 49 箇所目の上映となる。映像の中では、客観的な事実とは異なるその人固有の現実が提示され、鑑賞者によっては違和感や反発を示されることもある。上映会という研究成果の共有の方法は、人びとのリアリティが提示されることで対話を促すことができているとも捉えられ、可能性を感じている。

3) 上映「移動する『家族』」【32 分】



上映会の様子

4) ディスカッション【参加者参加型】

話題提供者から提示された 2 つの設問（あなたにとって「家族」とは何ですか、「家族」になるために、あるいは「家族」であるためには何が必要だと思いますか）をもとに意見交換を行った。その後、討論を行い、主に以下の 3 つの点について討議を行った。

① 映画に内在する編集と作品性

- ・ 協力者 5 人の選定と映画の中で紹介される順番には意図があるのか？（岩佐）
- ・ 紹介する順番は調査の時系列をそのまま採用した。最初のケースは研究室の留学生で、彼女と制作した映像を見せて、国境をまたがる家族関係があり 1 年間調査に参加できる協力者を募った。結果として 30 代が多いが、事情があり断念した 50 代の協力者もいた。研究者が協力者を選ぶというよりは、協力者が研究への参加を選んでくれて成立するものだと考えている。（大橋）
- ・ 家族関係が良好に語られるものが多かったように感じたが、意図的なものなのか？（石垣）
- ・ 映画の編集力が高く、全体を通したメッセージがあるのか気になった。（丸山）
- ・ 映画の中の語りには、ポジティブな要素だけではなくネガティブな要素があったり、家族の捉え方にも矛盾があったりする。編集ではそうした固有の質感を最大限伝えることを重視している。自身の編集作業は、協力者によるナレーションを映像化していくことに注力した。（大橋）
- ・ 全体のメッセージは意識的に設けておらず、商業映画の監督からは商業映画では成立しないと指摘されたこともある。自身は、語りの中での家族という概念の移ろいに関心があり、上映会においても、捉えどころのない“もやもや”した場を共有することを重視している。（大橋）

② 研究に映画を埋め込む可能性

- ・ 映画は 5 人で終わりを迎えるが、研究としては 5 人で成立するものなのか、その後の展開も見

越しているのか伺いたい。（坪内）

- ・ 人数の設定は博士論文のスケジュールの都合が大きい。調査期間はライフイベントをおおよそ把握できるよう 1 人あたり 1 年に設定した。現在はよりミクロな移動の経験と家族のあり方を理解するプロジェクトに取り組んでいる。（大橋）
- ・ 5 人の語りを映像というかたちで鑑賞すると、議論の場で参加者が話しやすくなり、家族という個人的なトピックを扱う上では可能性を感じる。今日では標準家族が機能していないことがよく指摘されるものの、それだけでは議論が不十分で、個人的な家族観の共有を通じて実態に迫っていくことが必要だと考えている。（大橋）
- ・ 最初は協力者に鑑賞してもらうようにしている。調査のはじめは移動経験をネガティブに捉えていた協力者が、映像を鑑賞した後ポジティブに捉え直しがされる場面もあった。（大橋）

③ 移動が生む現代的な家族の距離感と空間

- ・ 離れた距離にいても関係を継続させることができるのが今日の状況であり、それによって独特な距離感が生まれている。トランスナショナルを主題にすることで、現代的な距離感が浮き彫りにされているように感じた。（岩佐）
- ・ 家族が他国に転居することで、訪れたことがない土地であっても愛着を感じるができる。移動は、移動する本人だけではなく、他の家族にも特徴的な影響を与えており、双方に異なる空間が立ち現れているように感じる。（大橋）

5) まとめ（森傑・北海道大学）

無理にまとめる必要がないように感じられたが、個人的には家族について改めて考える機会は少なく、こうした場の設定は有意義だと感じた。映画の中で、家族を取り巻く物理的な環境の意味がテクノロジーによって変化している様子が描かれており、印象的だった。また、映像作品という学術的な成果の提示の方法も興味深かった。【以上、文中敬称略】



ディスカッションの様子